



寄稿：技術士の生き方 — 生涯現役・生涯勉強 —

京都大学大学院
工学研究科長・工学部長
京都大学技術士会
大嶋正裕 副会長



私自身は、残念ながら技術士でない。技術士という資格を「取りたいな～」を思うことが幾たびもある。ご存知のように大学の教授には教授免許(資格)なるものがない。工学部の教授であっても、「その知識は産業界や社会に役に立つ技術だ」と、だれも認定してくれているわけではない。一方、技術士は、専門分野で仕事ができる十分な技術の知識と経験を持っているとして国家が保証してくれている。すごいこと誇らしいことだと思う。しかし、国の認定資格を受けられることから生まれる憧れより、企業を退職して自身で技術士事務所を設立して活動されている方々とお話するときに、技術士のすごさを感じるとともに憧れを強くいただく。

私の専門は高分子成形加工である。その活動母体の一つにプラスチック成形加工学会がある。1300名程度の会員数の学会だが、8割が企業関係会員という他学会とは異なる特徴をもつ。その学会で技術士の方々とお会いする機会が数多くある。その方々のなかには、企業を退職して個人事務所を開設して

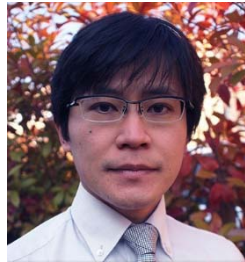
いる方、年齢が70歳以上の方々がいらっしゃる。技術的な課題に悩んでいる“若造”の私に、ご自身の経験を語り、実経験に基づくサジェスションをくださることも多い。そのような経験豊富な方々が、学会に積極的に参加し、最新の情報を取り入れ、自身の経験の中で咀嚼し、自身の技術をさらに磨こうされている。その姿、「生涯現役」「生涯勉強」の姿勢は、美しく、頭が下がる思いである。

理系の場合、博士の学位は、研究に取り組むときの“いろは”を学んだこと、今から研究者・技術者として歩み始めてよいとする認定書、技術士の資格は、その歩みの中で経験を積んだこと、技術者として他を指導できることを認めるものであるように思う。技術士の方々におかれては、職場はもとより、学会や大学の授業の場に積極的に参加し、その知識と経験と技士道を、次の世代に伝承して欲しい。



寄稿：これからの流域圏減災論： 巨大地震と極端大気現象に どう立ち向かうか

京都大学防災研究所
地盤災害研究部門
准教授
松四 雄騎



近年、地震や豪雨による土砂災害が日本各地で毎年のように発生しています（図 1）。斜面崩壊や土石流は、流域の地形を作り出す自然現象の一つであり、それが全く起きないように対策を講じることは不可能といえます。また、数多の流域から生産される土砂を全て人工構造物で防ぎきるような方策もまた現実的ではありません。



図 1 2016 年熊本地震により阿蘇カルデラ内で発生した斜面崩壊（上段）および 2017 年九州北部豪雨により福岡県朝倉で生じた斜面崩壊（下段）。

強大な地震と極端な大気現象が頻発する今日において、斜面変動のリスクに向き合って減災を実現してゆくには、流域圏内で起きている地球表層過程の機構と要因をよりよく理解したうえで、いつ、どこで、どれくらいの土砂移動が生じるかを予測し、警戒・避難に役立てることが望ましいといえます。そのような減災を目標とした研究と、それによって得られる知見に基づいて社会実装できる減災の仕組みをつくってゆくこともまた地球表層科学が担うべき役割といえるでしょう。ここでは、まず、特定の斜面変動現象に絞って災害予測のための先端的取り組みを紹介し、今後の展望を述べます。

日本のような温暖湿潤変動帯における山地斜面の大部分は、基盤岩石の風化生成物や風成堆積物および有機物の混合した土層に覆われています（図 2）。豪雨や地震を引き金として、土層が基盤との境界付近でせん断破壊をおこし、あるまとまりをもって崩落する現象を表層崩壊と呼んでいます。表層崩壊により土層は斜面から除去され、その場所は一旦は表層崩壊に対する免疫を獲得します。しかしその免疫性は、土層が再び集積することによって時間とともに失われ、次の表層崩壊の準備が整うこととなります。こうした数百年周期での斜面のサイクリックなシステムを定量的にモデル化して、地理情報システム上で土層発達—降水浸透（あるいは地震動伝播）—表層崩壊発生シミュレーションを実行することができれば、表層崩壊の場所・規模・時刻の 3 要素予測を実現するための新しいハザードマップをつくることができると考えられます。

表層崩壊を予測するうえで、地用近傍の岩盤中に蓄積している宇宙線由来の同位体を加速器質量分析によって定量することで土層の生成速度が決定できるようになったことと、航空レーザー測量によって精密なデジタル地形モデルが得られるようになったことが、大きな前進をもたらしました。これにより、流域内の斜面における土層の厚みの空間的な分布を計算することができるようになったのです。こうした新しい技術によって獲得されたデー

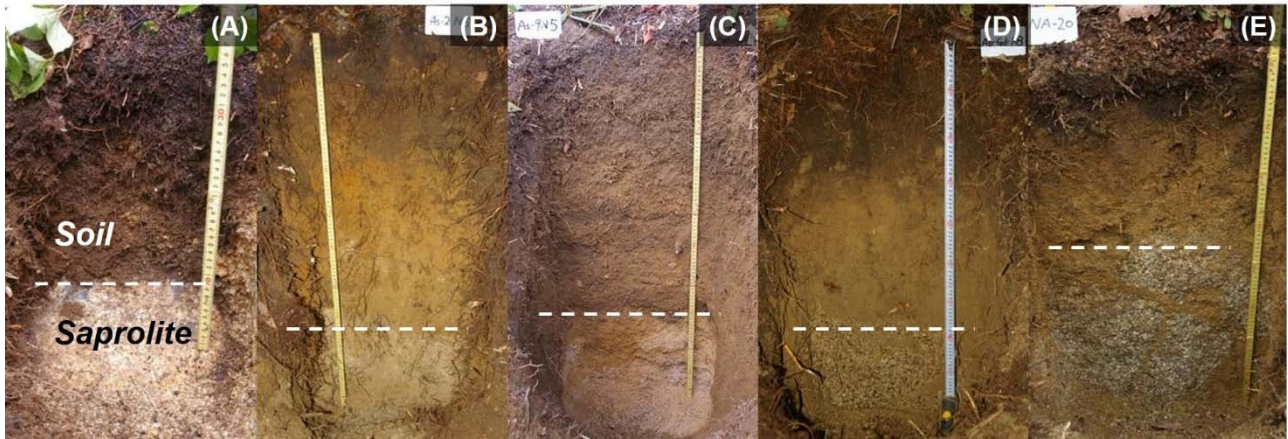


図2 花崗岩類を基盤とする山地の斜面における典型的な土層断面。破線よりも上の褐色部が土層、その下の白色部が風化した岩盤（サプロライト）。場所は北アルプス（A, B, C）、阿武隈山地（D）、京都白川流域（E）。

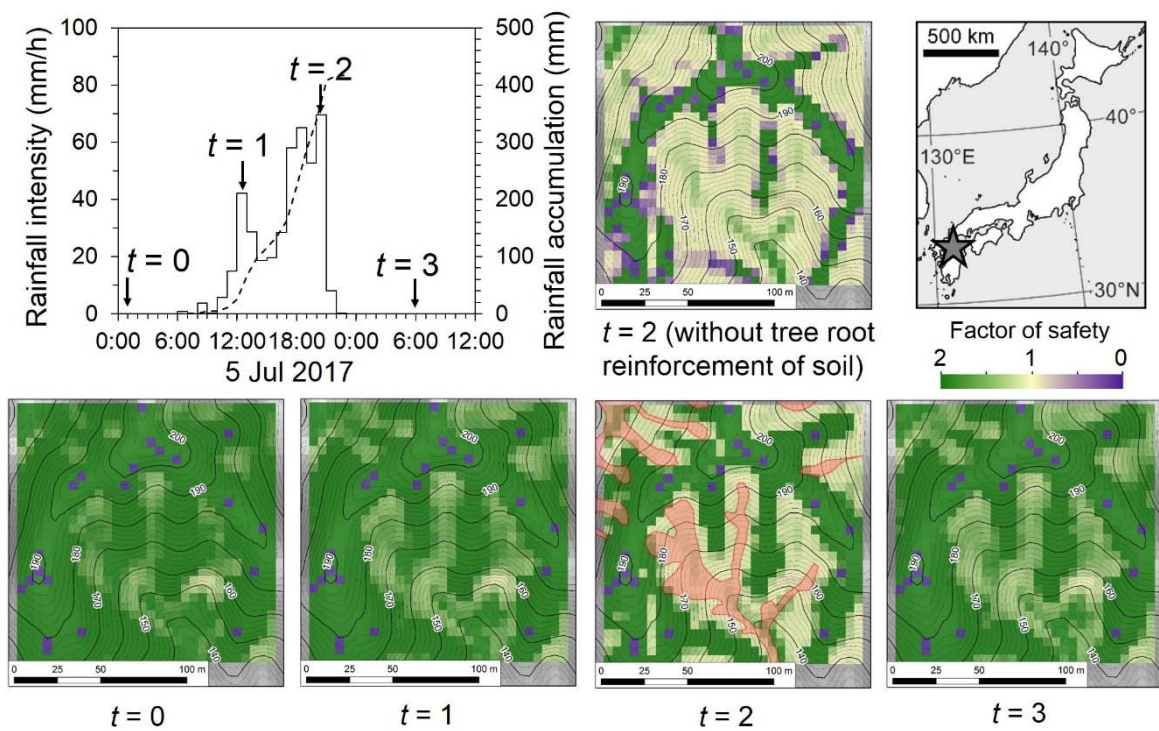


図3 2017年九州北部豪雨の発災地における降雨に伴う斜面の不安定領域の時空間変化の計算例。左上のグラフはレーダーにより観測された実際の降雨の強度と累積雨量の経時変化。下段の図は、降雨イベント中の矢印で示された時点での、斜面安全率の空間分布（斜面安全率が1以下であれば不安定と判定される）。 $t=2$ の時点での赤いポリゴンは、実際の表層崩壊分布を示す。また、 $t=2$ の時点については、上段に、樹木根系の土層補強効果がない場合の計算例も示した。森林の効果を検討しなければ、斜面の不安定性を過大に評価してしまうことがわかる。

タと、現場での地質・地形踏査や土層の試孔掘削調査、また土壌水分計や間隙水圧計を用いた斜面水文観測、あるいは原位置試験や供試体を用いた土質試験など、従来から種々の学問分野で行われてきた手法によるデータとを組み合わせることで、表層崩壊を予測するための空間情報システムが構築できるようになってきています。

図3は、2017年の九州北部豪雨の発災地を対象に、表層崩壊予測の確度と精度を検証した例です。降雨の進行とともに、斜面上の不安定な領域が拡大し、降雨ピークと同時に極大に達している様子が読み取れます。このときの不安定領域の広がり、実際に発生した表層崩壊の分布と調和的であるといえます。これは土層の厚みの空間分布、地中の間隙水圧の上昇、樹木根系による土層のせん断強度補強効果など、斜面変動に強い影響をおよぼす要因をそれぞれ定量的にモデル化し、それら全てを地理空間情報システム上で統合的に解析した成果です。

このように、豪雨による表層崩壊については、減災に役立つ新しい情報の提供が可能な段階に至りつつあります。ただし、いかに高性能なモデルを構築したとしても、個別斜面の表層崩壊を全て厳密に言い当てることは原理的にできません。それは、先行降雨の影響や過去の崩壊発生の履歴、斜面構成物質の物性の空間的な多様性といった確率的な振る舞いをもつ要因が存在するためです。今後は、決定論的な発生予測をベースにしたモンテカルロシミュレーション等による確率論的な評価法の開拓が課題となるでしょう。こうしたアプローチにより、高時空間解像度のレーダー雨量を入力値として流域斜面の不安定化が時々刻々と追跡・可視化され、流域単位での流出土砂量の確率予測が実現されてゆくと考えられます。

流域圏内で生じる事象は多様であり、表層崩壊のほかにもそれに付随して起こる土石流、岩盤が崩落する深層崩壊、またそれに伴う河道閉塞や堰止湖の決壊、天井川化した河川の氾濫など、斜面と河川の複合システムを深く理解していなければ評価で

きないハザードが遍く存在しています。災害の素因としての流域斜面の地質・地形条件は多様であり、斜面変動の誘因が地震であるか豪雨であるかによっても想定すべき事象は異なります。こうした複雑な自然現象への対応を迫られるとき、ある特定の学問分野の成果や手法が唯一最良ということはありません。必要であれば分野の境界を越えて真に学際的な新しい体系を作り出し、持てる全ての知見と技術を援用して総力戦を展開しなければ今後の巨大災害時代を乗り越えてゆくことはできないでしょう。その姿勢は、研究開発から技術的応用、社会実装に至るまで首尾一貫して必要不可欠なものです。また減災の実現は、研究機関・企業・行政・地域社会の有機的な連携なくしては成り立たないはずで、巨大海溝地震や直下型内陸地震の危機が迫り、人為的気候変化に伴う広域的豪雨や強大な台風の高頻発が危惧されるいまこそ、防災施策をもっと自由化し、地域に特化して災害事象を理解し、待ち構え、しなやかに対応することで生命と社会基盤を守ることでできる仕組みづくりに本気で取り組まなければなりません。

基礎と応用は車の両輪などよく言われますが、自然災害科学において基礎研究と技術応用は互いに噛み合った歯車のようなものです。技術的な面でのニーズや迫る問題があるからこそ、基礎研究の課題が定まり、またその成果は常に社会還元されることを念頭に置かなければなりません。基礎的理解の深化と応用的技術の発展がスパイラルをつくって社会的課題を深く掘り下げて解決してゆく、その掘削ドリルのような姿もまた、この新しい科学技術体系の魅力であります。波乱を乗り越え将来を担う新しい人材が、既存の体系を良く学び、また若さゆえの勢いによって壁を打ち壊し溝を埋めて、見晴らしの良い新たな地平を開拓してゆくことが期待されます。



第9回講演会

京都大学東京オフィスにて、京都大学技術士会が主催する第9回講演会が2017年9月20日に開催されました。この行事は会員の継続研鑽を目的として企画され、関東地区に在住する会員を中心に他大学関係者も含め約60名の参加がありました。



写真1 第9回講演会開催風景

石原吉雄 幹事（工学研究科・1988年修了）が司会進行し、冒頭、武藤光 京都大学技術士会副会長・代表幹事（工学研究科博士課程・2000年修了）より、開会挨拶および京都大学技術士会の概要説明等がありました。それに続き、阪口秀 国立研究開発法人海洋研究開発機構（JAMSTEC）研究担当理事補佐（農学研究科博士課程・1995年博士（農学）取得）の講演会が始まりました。

講演は「工学と理学の狭間ー我々はどこに向かえば良いのかー」と題し、今後さらに学術研究や科学技術が発達していくために必要と考えられる事項に関して、阪口理事補佐の長年の研究や海外での経験を基に、興味深くかつ分かりやすくお話いただきました。

まず、タイトルである「工学」、「理学」、「狭間」のそれぞれについて定義を示し、「工学」は、エネルギーや自然の利用を通じて便宜を得る技術であり、公共のために有効な事物や快適な環境を構築することを目的とする学問であるのに対して、「理学」

は自然科学の基礎研究であり、そもそもの役割が違うことの説明がありました。



写真2 坂口氏による講演

その後、所属先のJAMSTECの経営理念を示した上で、独立行政法人および国立研究開発法人の役割などについて紹介があり、「工学」と「理学」のバランスの重要性を説明しました。一方で、地球深部探査船「ちきゅう」、「メタンハイドレート」、「いくつかの大学での取り組み」の事例を用いて、現在の日本が「工学と理学の狭間」で直面している課題を明確に示し、サブタイトルである「我々はどこに向かえば良いのか」のヒントが与えられました。

講演の最後には、(1) 教育課程における高度な専門性はキープすること、(2) ダブルメジャーや異なる専門を渡り歩くこと、(3) 組織の中では、業務の中で混ざり合うことの3点を、「工学と理学の狭間」の結論として示し、ダメだと感じたら変える勇気を持つことの必要性についても併せて説明しました。

講演終了後の質疑応答では、組織を変えていこうとした場合、周囲が付いてこないなど実際には多くの困難が存在している中で、円滑に変化させていくための方法や工夫についてなど、多くの質問が出されました。最後に、佐竹孝 副代表幹事（工学研究科・1992年修了）より閉会挨拶を行い、盛会のうちに講演会は終了しました。

第5回大会・特別講演会

第12回京都大学ホームカミングデイの開催に伴い、京都大学技術士会第5回大会・特別講演会が、百周年時計台記念館で2017年11月3日に開催されました。

大会・特別講演会は、会の主要事業の一つである会員の継続研鑽と会員相互の交流を目的とし、毎年1回、京都と東京で交互に行われているもので、今回は関西地区に在住する会員を中心に53名の参加がありました。冒頭、大西有三 会長（元理事・副学長、工学部・1968年卒）の挨拶に続き、武藤光 副会長兼代表幹事（工学研究科博士課程・2000年修了）から、当会の2016年度の事業・決算報告と2017年度の事業・予算計画の説明がありました。

特別講演会では、矢野浩之 生存圏研究所教授（農学研究科・1984年修了）から、「木の国ニッポンの資源～セルロースナノファイバー～」と題して、全ての植物細胞の骨格をなしているセルロースナノファイバー（CNF）の産業利用の可能性や最新の研究についての講演がありました。機械、化学、医療、建設など様々な産業への応用が期待される材料であり、日ごろ技術者として活躍している参加者にとっても大変興味深い講演となりました。講演に引き続き行われた質疑応答では、会場の参加者から多くの質問があり、矢野教授には1つ1つの質問に丁寧に答えられました。



写真3 矢野教授による講演

講演会終了後、懇親会が開催されました。同会副会長の北村隆行 工学研究科長（工学研究科・1979年修了）ならびに西村文夫 公益社団法人日本技術士会常務理事（法学部・1978年卒）の挨拶の後、技術士会副代表幹事の天津宏康 工学部教授（工学研究科・1981年修了）の乾杯の発声で始まり、幅広い年齢層・分野の技術者の方々が参加されての有意義な意見交換が行われました。懇親会は、大坪利行 幹事（工学研究科・1978年修了）によるトランペットの演奏で盛り上がり、最後は全員で「琵琶湖周航の歌」を合唱して、本学の発展と会員のますますの健勝を祈念して、盛会のうちに閉会しました。



写真4 集合写真



三大学技術士会合同・第三回講演会

東京都品川区のスクエア荏原にて、大阪大学技術士会（大阪銀杏技術士会）、東北大学技術士会（技術士青葉会）および京都大学技術士会の合同企画による講演会が2018年2月3日に開催されました。これは会員の継続的研鑽と大学技術士会間の交流を目的として企画しているもので、3回目となる今回は、約30名の参加がありました。

講演会は、沖津修 技術士青葉会幹事による司会進行のもと行われました。岡部政美 鹿島建設東京土木支店土木部専任部長による「建設業の安全管理～安全への思い、伝えるには～」と題した講演では、日本の建設最大手で長年取り組んできた体験を基にした、安全管理を中心とした現場のマネジメントに関する内容のご紹介がありました。「作業員さんに毎日元気で帰ってもらうためには？」や、「事故を起こした時に悲しむのは誰ですか？ 家族です。」など、事故を絶対に起こしては駄目、という強いメッセージが伝えられました。



写真5 岡部専任部長による講演

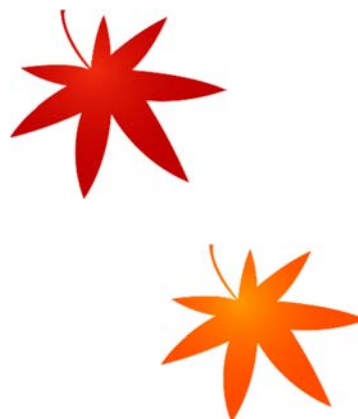
続いて、齋藤尚樹 科学技術・学術政策研究所（NISTEP：文部科学省直轄国立試験研究機関）総務研究官による「【文科省 NISTEP 分析】科学研究の注目領域と将来予測 ～ナノサイエンスからスマートモビリティまで・技術戦略への展開と高度技術人材への期待～」と題した講演では、文部科学

省が現在取り組んでいる日本の技術戦略や、そのための人材育成の考え方について紹介がありました。日本と他国の現状の違いについて、同省が持つ様々なデータ分析を駆使した結果も紹介され、また本企画に合わせて、三大学に関する興味深い分析結果の報告もあり、参加者の関心を集めました。



写真6 齋藤総務研究官による講演

講演会の締めくくりとして、武藤光 京都大学技術士会代表幹事が閉会の挨拶を述べ、そのあと、恒例となっている懇親会で各会の会員同士が親睦を深めました。



第10回講演会 (イブニングセミナー東京)

「京都アカデミアフォーラム」in 丸の内において、2018年7月18日に京都大学技術士会講演会（イブニングセミナー東京）が開催されました。この行事は、当会の主要事業の一つである会員の継続研鑽を目的として企画されたもので、10回目となる今回は、大迫政浩 国立環境研究所資源循環・廃棄物研究センター長（工学研究科博士課程・1991年修了）より、「福島を中心にした放射能汚染からの環境再生（～廃棄物や除去土壌の問題を中心に～）」というタイトルで講演がありました。



写真7 大迫政浩センター長

講演会には43名の参加があり、栗本卓 幹事（工学研究科・1991年修了）が司会進行し、冒頭、当会の武藤光 副会長兼代表幹事（工学研究科博士課程・2000年修了）より、開会挨拶および京都大学技術士会の概要説明がありました。講演会では、福島第一原発の事故によりもたらされた環境汚染の問題に対する国の取組の流れや今後の方向性、そして、廃棄物や除去土壌の処理に関する様々な技術的課題についてわかりやすく説明がありました。また、講演後は同会場にて懇親会を開催し、横尾敦 幹事（工学部・1993年卒）の司会進行のもと、26名の参加があり、大迫氏を中心として和気あいあいとした意見交換が行われました。最後に、本学の発展と会員のますますの健勝を祈念するなどして、盛況のうちに閉会しました。



写真8 第10回講演会開催風景



第6回大会・特別講演会

2018年9月8日(土)に 機械振興会館(東京都港区)にて、京都大学技術士会第6回大会・特別講演会を開催しました。大会は毎年1回、京都と東京で交互に行われ、今回は49名の参加がありました。

大西有三 会長(工学部1968年卒)の挨拶に続き、武藤光 副会長兼代表幹事(工学研究科博士課程2000年修了)から、当会の2017年度の事業・決算報告と2018年度の事業・予算計画の説明がありました。

続いて特別講演会となり、トピックスとして、公益社団法人日本技術士会の中川裕康副会長(工学部1973年卒)から「技術士制度の改正について」をご講演頂きました。



写真9 中川氏による講演

また、当会副会長で京都大学大学院の大嶋正裕工学研究科長・工学部長(工学部1981年卒)から「京都大学の工学教育の現状と課題」をご講演頂きました。



写真10 大嶋副会長による講演

基調講演は、京都大学大学院工学研究科 藤井聡教授(工学部1991年卒)から「歴史の謎はインフラで解ける～教養としての土木学～」についてご講演いただきました。



写真11 藤井教授による講演

最後に、田岡直規副会長(工学部1981年卒)から閉会挨拶があり、参加者全員で写真撮影を行いました。大会後、懇親会が催されました。幅広い年齢層と多分野の専門技術者の集まりという他の同窓会にない長所を生かし、有意義な意見交換の場となりました。最後に、本学の発展と会員のますますの健勝を祈念して、盛況のうちに閉会しました。



写真12 集合写真

第12回「技術士を目指そう」説明会

京都大学技術士会が主催する「技術士を目指そう」第12回説明会が、関東地区（日本技術士会・機械振興会館会議室）において2018年2月24日に開催されました。この行事は、同会の主要事業の一つである本学の学生、職員、卒業生に対する技術士資格の取得支援を目的として定期的に行っているもので、関東地区に在住する卒業生を中心に13名の参加がありました。

武藤光 代表幹事（工学研究科・2000年修了）の開会挨拶に始まり、第1部では技術士制度の説明に続いて、各分野で技術士として活躍されている大坪利行 幹事（工学研究科・1978年修了）、松井理恵 幹事（地球環境学舎・2004年修了）、田中和明氏（工学研究科・1982年修了）の3名により、それぞれの体験を交えた技術士資格取得のメリットに関する講演がありました。また、2016年度に技術士二次試験に合格した中島与博氏（工学研究科・2010年修了）より、技術士試験の合格体験談について講演がありました。その後、試験制度の説明と京都大学技術士会の設立趣旨・活動状況説明がありました。



写真13 第12回説明会開催風景

休憩を挟んで、第2部では参加者が取得希望部門別のテーブルに分かれての部門別相談会が実施

されました。各テーブルでは活発な質疑応答が行われ、個別のケースに合わせたより詳しい受験相談が実施されました。また、相談会に続いて、参加者の受験へ向けた壮行を兼ねて、交流会が行われました。



写真14 相談会開催風景



第13回「技術士を目指そう」説明会

工学研究科主催、京都大学技術士会共催で「技術士を目指そう」第13回説明会が、桂キャンパスBクラスター 桂ホールにおいて2018年4月20日に開催されました。学部生、大学院生、教職員等合わせて24名の参加がありました。



写真15 第13回説明会開催風景

最初に、技術士でもある大津宏康 工学研究科教授・副代表幹事（工学研究科・1981年修了）が、「日本では所属する組織で信用評価される場合が多いが、今後は欧米と同じく個人の能力で信用評価されるようになるだろう。個人の技術力を国が認定する技術士の取得は有効な手段の一つである」と紹介しました。

次に、田岡直規 副代表幹事（工学研究科・1983年修了）から京都大学技術士会の紹介と、上田泰史 幹事（農学研究科・1983年修了）から試験制度を含めた技術士制度の説明がありました。

続いて、各分野で活躍する先輩技術士でもある同会幹事から、技術士資格取得のメリットや受験の心構えなどの体験談が語られました。

第23～25回 幹事会 第3回中長期計画研修会 第7回役員総会

2017年10月12日に第23回幹事会、2018年2月24日に第24回幹事会、2018年7月4日に第25回幹事会が開催されました。

各講演会や大会、「技術士を目指そう」説明会などの各種行事に関する企画や計画、実施後のアンケート結果、収支報告等が行われました。

また、今後の体制のあり方について検討する「役員・幹事体制ワーキンググループ」も行われています。

なお、2018年9月1日に開催された3回中長期計画研修会において、技術士補を対象とした「準会員」を設けることが提案されました。この案は2018年9月8日の第7回役員総会において、方向性について承認されました。今後、会員規約を一部見直すなど、準会員受け入れに向けた対応を予定しています。

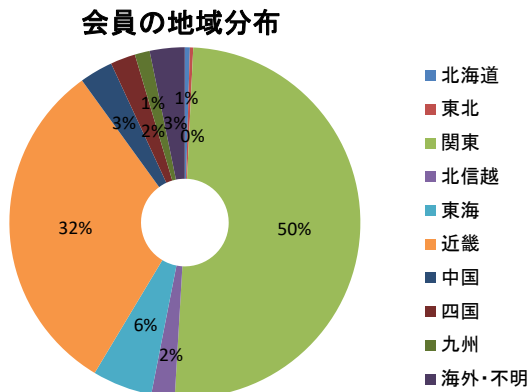
会員状況

1. 会員数

2018年6月末時点での会員数は678名です。

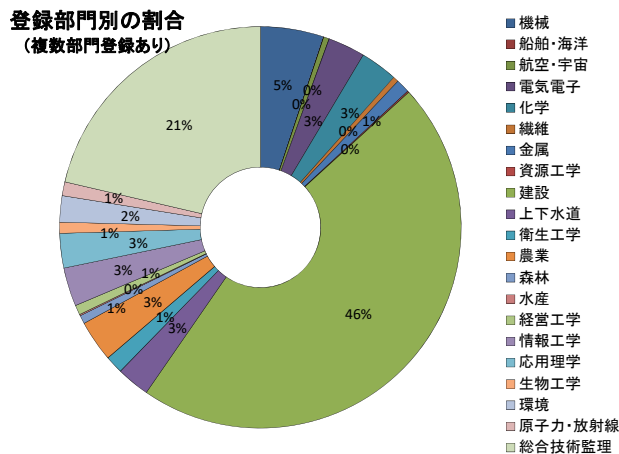
2. 会員の地域分布

関東が50%、近畿が32%となっています。



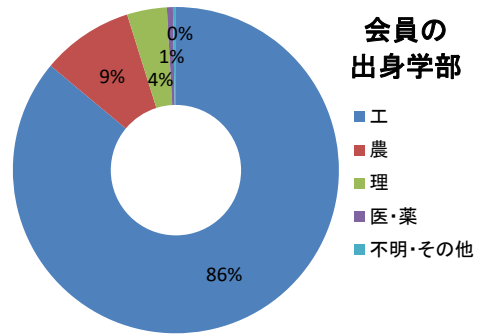
3. 登録技術部門の割合

建設が46%、機械が5%です。他の20部門に加えて取得される総合技術監理は21%です。



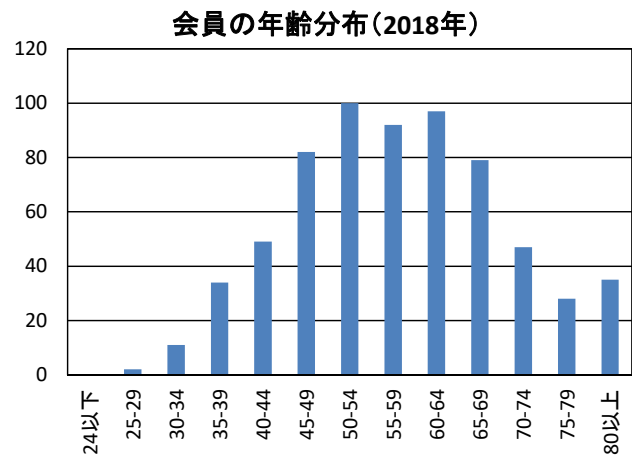
4. 卒業学部の割合

工学部が86%、農学部が9%、理学部が4%です。なお、工学部内では土木系が半分を占めています。



5. 年齢分布

会員データの大学卒業年から類推した年齢分布を示します。45~69歳の会員が多数を占めています。



今後の行事予定 (10/1~3/31)

・2018年11月3日 第11回講演会・第14回技術士を目指そう説明会 (京都大学)・第26回幹事会

・2019年2月頃予定：第15回技術士を目指そう説明会 (東京)

詳しい日程・内容等は、確定次第ホームページ等に掲載しますのでご覧ください。

広報活動

京都大学技術士会公式ホームページと公式Facebook ページを開設しております。これまで、電子メールからしかできなかった会員登録や行事申込み、会への連絡なども、ホームページから簡単にできるようになりました。

これまで通り本学同窓会ホームページとも連携をしています。現在のコンテンツは、行事の案内・報告が中心ですが、タイムリーな情報発信を心がけ、充実を図っていきたいと思います。皆さま、ぜひ訪れてみてください。

【京都大学技術士会の公式ホームページ】

<http://ku-pe.net/>

The screenshot shows the website layout with a header for '京都大学技術士会' and a main content area. On the left, there is a '京大技術士の概要' (Overview) section with bullet points. The main content features 'イベント案内' (Event Information) for the 4th General Meeting and '今後の予定' (Future Schedule). A '京大アラムナイ' (Alumni) section is also visible.

【京都大学技術士会の公式 Facebook ページ】
<https://www.facebook.com/KyodaiPE/>

The screenshot shows the Facebook page for '京都大学技術士会' (KyodaiPE). The page features a cover photo of the 'Kyoto University Clock Tower Centennial Hall' and a profile picture of the organization. The main content area includes a post about a general meeting and a 'Like' button. The right sidebar shows search results and page information.

【京都大学同窓会サイト内の京大技術士会ページ】
<http://hp.alumni.kyoto-u.ac.jp/about/compete/domestic/024.html>

The screenshot shows the '京都大学同窓会' (Alumni Association) website page for the Faculty of Engineering. The page has a blue header with navigation links. The main content area is titled '京都大学技術士会<平成25年>' and provides information about the organization's activities, membership, and contact details. A '連絡先' (Contact Information) section lists the website and Facebook page. A 'ホームページ' (Home Page) section provides a direct link to the organization's website.

運営体制の紹介

京都大学技術士会の運営体制（2018年9月8日役員総会時点）は下図のとおりです。

表-2と表-3は2018年度の役員と幹事メンバーです。大学は●、関西は●で示します。その他は関東です。

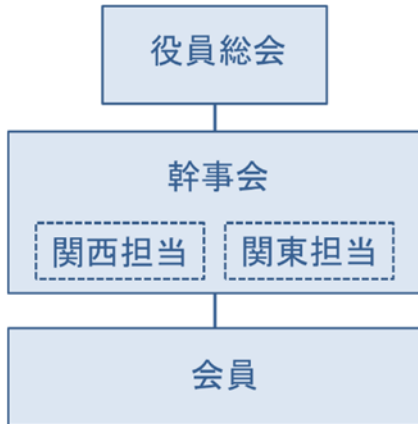


表-2 2018年度役員

会長	大西 有三 ● (元副学長)	会務総理
副会長	大津 宏康 ●	大学行事
副会長	大嶋 正裕 ● (工学研究科長)	大学総括
副会長	武藤 光	会務執行総括
副会長	田岡 直規 ●	関西総括
監事	武山 正人 ●	
参与	高宮 脩武	
参与	林 克己	

表-3 2018年度幹事

●: 大学
●: 関西

代表幹事	会務執行総括	武藤 光	
副代表幹事	関西総括	田岡 直規 ●	
副代表幹事	関東総括	佐竹 孝	
幹事	山崎 洋右	幹事	綾木 光弘 ●
幹事	嶋田 弘僧	幹事	上田 泰史 ●
幹事	白川 正広	幹事	千田 琢 ●
幹事	大坪 利行	幹事	久保田 正博 ●
幹事	辻井 修	幹事	狩野 陽 ●
幹事	中谷 武彦	幹事	仲矢 順子 ●
幹事	下村 泰造	幹事	岡田 浩樹 ●
幹事	横尾 敦	幹事	小川 明彦 ●
幹事	新原 雄二	幹事	青井 一 ●
幹事	栗本 卓	幹事	吉田 晋侑 ●
幹事	中山 かおり	幹事	馬場 寿人 ●
幹事	龍原 毅	幹事	高橋 良和 ●
幹事	松井 理恵	幹事	佐伯 賢一 ●
幹事	石原 吉雄		
幹事	今西 秀公		
幹事	坪倉 辰雄		
幹事	樋口 義弘		

幹事の紹介



四半世紀

今西 秀公



平成5年に前田建設工業株式会社に入社後25年間、主に内勤の技術部門において、研究開発や設計業務に携わってきました。技術士は平成14年に「建設部門」で初めて登録しましたので資格を得て16年を経過しましたが、この間、「建設部門」で4科目、総合技術監理部門で1科目の合計5科目で合格・登録することができました。

建設業界では設計施工一括で発注される案件が増えつつあり、私のような者にもその資格が生きる場が現れてきたように思います。最近では、技術士資格が必要とされる「設計管理技術者」として発注者と接する機会も増えました。今後も様々な業務に挑戦し、社会に貢献していきたいと考えております。

(平3工卒、平5工修、建設/総合技術監理部門、前田建設工業株式会社)

「会員紹介」の原稿募集

本紙に掲載する会員の皆様の自己紹介を募集します！掲載ご希望の方は、下記の内容を下記の会報担当アドレスまでお寄せください。

《自己紹介 執筆要領》

- ① 標題 (概ね 10 文字以内)
- ② 内容 (技術士として、京大との関わりなど、ご自由に 300 文字程度)

③ 最終行【】内に【卒業(修了)年、学部(研究科)、技術部門、所属】を記入

④ 顔写真 (JPEG形式)

《会報担当アドレス》

office@ku-pe.net

会員の皆様へのお願い

京都大学技術士会は、入会金や年会費はなく、行事毎の必要費用を参加費として負担いただいています。そこで次のお願いがあります。

1. 入会・登録情報変更方法

京都大学技術士会ホームページの専用フォームから必要な情報をお送りください。

<http://ku-pe.net/>

最近、登録いただいているアドレスにメールが届かない事例が多くなっております。メールアドレスが変更になった方は、事務局までお知らせいただきますようお願いいたします。

2. 京大卒の技術士さんに入会をお勧め下さい

京大卒の技術士さんをご存じでしたら、ぜひ入会をお勧めくださるようお願いいたします。

3. 講演会などの行事にも参加をお勧めください

現在のところ、会員以外の方も講演会に参加できるようにしています。同僚の方や同窓の方などに、開催通知を転送していただければ幸いです。

4. ご提案、ご意見お待ちしております

イベントのご提案や、改善すべき点などのご意見は、ホームページの専用フォームからお願いします。

編集後記

第6回大会・特別講演会で、大嶋副会長より、京大工学部では近年も女子学生の割合はあまり増えていないとのお話を聞きました。私は農学部出身で数学からも物理からも縁遠く、とてもリケジョと自称できない身ではありますが、より多くの女子学生たちが自分の可能性を広く捉え、技術者として活躍したいと思えるようにサポートしていきたいです。